

3月30日よりIFN α の投与を開始し終了直前に主訴が出現し入院となった。臨床所見、検査所見より、病毒性心膜炎（乳癌術後再発）と診断した。

本症例は乳癌の絶対的治癒手術から約10カ月で再発しており、IFN療法が早期再発に何らかの関与をしている可能性もあると考えられる。

長期間のステロイド治療が必要であった薬剤性肝障害と思われる1例

（至誠会第二病院消化器内科）

星野容子・足立ヒトミ・小川美穂・
宮崎英史・根本行仁・黒川きみえ

症例は67歳の男性で、1997年9月下旬より、感冒様症状が出現し、市販のスーフンB錠を内服し軽快した。10月初旬より39度の発熱、全身倦怠感、黄疸を認め、当科を受診した。肝胆道系酵素およびCRPの上昇を認め、入院となった。入院後の39度の稽留熱があり、胆道感染症を疑い、各種抗生剤を投与したが、症状は軽快しなかった。薬物服用後の肝機能障害および、発熱、黄疸という臨床症状より、薬剤性の肝障害を疑いソルメドロール40mg投与し、症状の劇的な改善および、肝胆道系酵素の低下が認められた。LSTは陰性であったが、スーフンB錠が原因となった薬剤性肝障害（疑診）と考えられた。

本症例ではステロイド投与が有効であったが、経過中ステロイドの減量で、発熱、検査所見の増悪が認められた。発症より1年3カ月、現在もプレドニン5mgを投与中であり、薬剤性肝障害には非常に稀な経過と考えられ、今後も慎重な観察が必要と思われた。

当科における肝細胞癌に対する経皮的マイクロ波凝固療法の治療成績

（社会保険山梨病院内科）

春山航一・細田和彦・飯田龍一

〔はじめに〕1996年8月より、肝細胞癌（HCC）に対する集学的治療の一つとして経皮的マイクロ波凝固療法（PMCT）を導入し15例に施行したので、治療成績について報告する。

〔対象〕HCCは35結節、高分化27、中分化7、低分化1結節であった。

〔方法〕局麻下ともにエコーガイド下に14G誘導針を介し深部凝固用電極針で1回60W、60秒とし数回照射、凝固した。

〔結果〕局所再発は、35結節中1結節で、局所再発率は2.9%と局所制御能は良好であった。他部位再発は、4例、13結節にみられた。合併症は、発熱が8例、右

胸水1例、腹腔内出血1例でいずれも対症療法で軽快した。

〔結語〕治療成績は良好であり、合併症も重篤なことはなく、有効な治療と考えられた。

長期経過観察により明瞭化した高分化型肝細胞癌の1切除例

（国立横浜病院臨床研究部、¹東京女子医大消化器病センター外科、²内科）

福田祥子・塚田百合子・平田真理・
飯塚雄介・加藤純子・関谷仁美・
磯野悦子・松島昭三・小松達司・
三木 亮・羽鳥 隆¹・
高崎 健¹・斎藤明子²

症例は74歳男性で、1991年に肝障害で当科を初診し、C型慢性肝炎と診断された。1993年に腹部超音波検査で肝S8に ϕ 6mmの高エコーのSOLを認め、経過中に徐々に増大し、1998年7月腫瘍は中心部の低エコー域の拡大を伴う ϕ 22mmとなり、肝細胞癌と診断した。8月肝S8切除術を施行した。

本症例は腫瘍の発育が緩徐であり、5年6カ月という長期の過程をエコーで経時的にとらえることができた貴重な高分化型肝細胞癌症例である。

乳頭部に再発した胆管内発育型肝細胞癌の1例

（県央胃腸病院、¹東京女子医大消化器

外科、²都立荏原病院） 木暮道夫・
藤本 章・宮内倉之助・林 俊之・
今泉俊秀¹・高崎 健¹・吉川達也²

81歳の女性で、胆管内発育型のHCCに対し左葉切除術が行われた。術後1年目に画像診断上、傍乳頭憩室内に腫瘍を認めたが、精査中に腫瘍が消失したため経過観察した。1年半後にanemiaが出現し、腫瘍が増大し、AFPが1,200に上昇した。CT, angiography, MRIで傍乳頭憩室内十二指腸腫瘍の診断でPpPDを施行した。十二指腸憩室の口側端に乳頭があり、その口側に3.5×2.5cmのきのこ雲状の有茎性の腫瘍がみられた。ミクロでは腫瘍はmoderately diff. HCCで、前回のHCCの像に類似していた。

HCCの乳頭転移例は文献検索上報告がなく、きわめてまれな1例と考えた。

肝細胞癌の経過観察中に歯肉腫瘍を認めた1例

（森下記念病院、*東京女子医大消化器病センター）

中上哲雄・
森下 薫・渡辺龍彦・西山隆明・
山田葉子・高崎 健*・斎藤明子*